

■児童・生徒の学力の状況

○「全国学力・学習状況調査」の結果から、国語では「書くこと」、算数では「図形」「測定」の解答の正答率が国と比べても低い。それぞれ「筋道の通った文章となるように、文章全体の構成や展開を考慮することができること」、「引用して、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができること」、「示された情報から、数量の関係に着目して、条件に合う値を求めること」、「公式化された図形の体積の求め方について理解していること」に課題が見られる。

○平均正答率は東京都と比較すると低いが、国とは同等か項目によっては国より高く、無回答率については、東京都、国と比べても低い。

○国語「話すこと・聞くこと」、算数「数と計算」等、は正答率が高い。領域よりも日常生活に近くイメージのし易さ、問題の読み取り易さに左右される傾向が強い。

○学習に興味や意欲をもって取り組む児童が多い。重点的に指導した点については改善傾向も見られる。

■授業革新推進に向けた、指導上の課題

○教科書等のテキストから必要な情報を正しく読み取り、問題を解決するために、より丁寧な支援が必要である。

○児童が主体的に学習に取り組みとなるような課題提示の工夫、学習形態の選択が必要である。

○論理的思考力を育むため、情報を選び、組み立てる学習活動を繰り返し行う必要がある。

○児童同士が学び合いを高めていくために、交流の方法や話し合いの場を工夫する必要がある。

■学校経営方針より（学力向上に関わる内容から）

「分かる、できる、楽しい授業」

○児童の心を揺さぶる授業を実践していき、主体的に学ぶ意欲の向上と基礎基本の定着を図る。探究的な学習を重視する中で、解決への過程が学べるように授業を工夫する。

「学び合う力の育成」

○児童同士が協働する場を設定することで、互いに多様性を認め合い対話によるウェル・ビーイングの社会を築くための素地を醸成する。

「一人一台端末の活用」

○児童の学習到達度に合わせた個別の指導を行う。また、児童自身が学習の最適化を目的としたタブレットの活用方法を見いだしていけるよう実践をしていく。

「保幼小接続・小中一貫教育」

○幼稚園から中学校まで12年間の発達段階に応じた系統的かつ効果的な指導を行うために、幼小中全ての校種の教職員が協力して切れ目のない教育を実践に取り組む。

■授業革新推進に向けての具体的な方策

視点1

板橋区授業スタンダードの徹底及び学習の土台となる読み解く力の育成

○表現することまでを含めた明確なめあての設定、ノートを活用した自力解決、協働学習の集団解決、児童の考えを生かしたまとめ、めあてに即した振り返りを実践する。

○基礎的読解力の6分類の視点を持ち、MIMやRSノートの活用を行うなど「読み解く力」の育成につながる日常的な取組を丁寧に行い、教科書などを正確に読めるようにする。

視点2

論理的思考力の育成

○新たな問題を見いだしたり、問題を解決するために必要なプロセスを組み立てたりする活動を取り入れる。

○ICTを活用し、プログラミング的思考を育成する。

視点3

板橋区スタンダードSの実践

○どの教科においても、児童の自己選択、自己決定、自己調整の場面を取り入れた学習を取り入れる。

○2つの教科を扱い「単元内自由進度学習」の実践を積み重ね、児童の自己選択、自己決定、自己調整する力を育む。

■MIRAI SCHOOLいたばし教育ビジョン2035
アクションプラン2028の実現に向けた具体的な取組

小中一貫教育の推進

○地域社会の一員として自律的に判断し行動できる姿を目指し、防災教育に重点を置いた探究的な体験学習を実践する。

○小中一貫教育による連続性をもったカリキュラムの中で、ESDの構成概念や視点を取り入れながら、自助・共助・公助の理解を深め、児童生徒が家庭や地域社会と連携した多様性を包摂した持続可能な防災・減災の取組が行えるようにする。

カリキュラム・マネジメントの推進

○「単元配列表」を基に、全教科で相互の関連付けや横断を図り、各教科等の内容と児童が身に付けてほしい資質・能力を高める。

○児童の実態を受けて、学習内容を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを行っていく。

ICT環境の適切な維持と活用
個別最適な学び・協働的な学びの実現

○一人一台端末を用い、情報の収集・整理・分析を行い、情報活用能力の育成を図る。また、友達との意見の交流や共有する場面で活用する。さらに、写真や音声、動画などの制作を行い、学習方法や表現方法の質を向上させる。AI搭載型ドリルを活用し、基礎学力の定着を図る。